4.　なわを回して

野じか達が、くぼ地にすを作った初めの間は、ジロッポは、まだきずがいたむので、いつも母じかのそばでうずくまっていましたが、十日あまり過ぎると、ジロッポのきずは、もとのようになおってしまいました。

そうなると、いつも元気なジロッポは、くぼ地などで、じっとねてはいられません。

いたずら子じかのジロッポは、
流れの水でジャブジャブと
きれいに毛なみを洗ったが
どろんこごっこでどろまみれ
さぁ　大変　しかられる
ヒーヨヒーヨ　ヒーヨヨ

いたずら子じかのジロッポは
すました顔して森の道
ひづめ自まんでかけ過ぎて
かあさん所へ帰れない
さぁ　大変　どうしよう
ヒーヨヒーヨ　ヒーヨヨ

（曲譜スカウティング誌五八号一頁）

こんな平和な日が、いく日か続くと、急にかけ足で春がやって来たように、雪や氷がとけ始め、滝の流れが、ひびきを立てて春を呼んでいました。

だが、野じか達は、ここへ来てからまだ、一度も人間に出会ったことがありません。それで、みんな人間をけいかいしながら、若草をさがして、温泉の出る川原のつつみまで出て行きました。

そして、父じかだけで、もっとあたりの様子をよく知っておきたいと思って、つつみづたいに川を少しさか上がってから、ジャブジャブ水かさの増した川原を向こ岸へ渡ると、そのつつみに続いた丘一面に、人間のたがやした広い畑がありました――そして、まかれた種が、春を知ったのか、土の下からむくむくと、強い力で地面を持ち上げようとしていました。

で、父じかが、

「もう、すぐ、春だなぁ――」

と、思いながら、暖かい空気をむねーぱいにすっていると、いつからついてきたのか、父じかの後から、いきなりしジロッポが飛び出して、畑のなかまではいって行こうとするので……

「畑へ、はいってはいけない――畑を荒らすと、人間が、しかがりにやって来る――お前は、川原の湯で暖まって、一日でも早く、きずあとをよくするのだぞ――」

父じかは、そうしかりながら大づので、ジロッポのからだをおすようにして、川原の小屋までもどってきました。そして、よく見ると、小屋は、ジロッポが、こわしたままだと思っていたのに、もとのようにしゅうぜんしてありました。それで、だれが、しゅうぜんしたのであろうかと、ふしぎに思いながらも、小屋の近所で待っているはずの家ぞくが、一ぴきも見当たらないので……

「ヒーヨ！ヒーヨ！」

声をはり上げて、家ぞくへ合図をしましたが……

「ヒーヨ！ヒーヨ！」

こだまが、帰って来るだけで……

「――――――――――」

家ぞくからは、なんの返事もありません。

それで、父じかは、心配で心配でたまりません。ジロッポを湯に入れるひまもなく、けん命になって家ぞくのにおいと、足あとをさがして、あちらこちらとかけ回りました。

そして、ようよう父じかは……

「あっ、足あとだ――」

と、滝の横道に、野じかの足あとを発見しました。

が、どうしたことでしょうか、大きな山犬の足あとが、野じかの足あとと入りみだれて……

「一っぴき、二ひき、３びき――」

さぁ、大変です。

三国峠の山犬が、足がら山の滝の上まで、野じかの足あとを追って来たのでしょう――とすると、野じかの家ぞくは、どうなっていることか、このまますてゝおけば、どうされてしまうか分かりません。

と言って、年とった大きな父じかでも、なか間の協力がないかぎり、三びきの山犬にはかないません。しかし、父じかは、家ぞくのしどう者です。家ぞくを見ごろしにすることはできません。危けんをおかしてでも、みんなを救わなければなりません。

そう決心すると、父じかは、ただ、家ぞくを助けたいために、む中になって家ぞくの足あとを追って、滝の横道を一散にかけおりて行きました。

父じかが、いなくなってしまうと、いつも元気者のジロッポも、急に心細くなって……

「おかあさん――どこへ行ったんだ――」

と、泣き出してしまいました。そして……

「僕、一ぴきになってしまって、さびしいよ――」

と、父じかの後から、けわしいがけ道を、おそるおそる一歩一歩用心しておりて行くと、ちょうどその下は、滝つぼでゴーゴー雪どけの水が、高いしぶきを立てて落ちていました。

こんな大きな滝を初めて見るジロッポは、なんだか滝つぼへ、すいこまれてしまいそうな気がして、冷たいしぶきがかかると、首をちじませて、ぶるぶる足までふるえて来ました。

そして……

「おかあさん――」

と、また、大声で泣き出しました。

だが、ジロッポは、子じかでも、けものの習せいで、家ぞくの足あとだけは見落とすまいと、大きな目をまるく開いて、足あとをさがしながら行くと、がけに続いた山と山との間に、細い用水路があって、滝つぼから水が流れ出していました。

そして、用水路に両がわから、ぞう木や、さゝむらがおおいかかって、昼でもまっ暗なズイドウになっていました。また、用水路には、深く落ち葉が重っていて、その下をくぐるように、きれいな水が流れていました。

よく見ると、その水をにごらせて通った野じかや山犬の足あとが、落葉の上にうすく残っています。

ジロッポは、見うしなったかと思っていた足あとの続きを発見したので……

「おやっ――」

と、思って、ズイドウのなかをのぞいて見て……

「まっ暗やみだ」

と、ちょっとしりごみしました。

だが、すぐ、その後から、子どもらしいこうき心がわいて来て、思い切ってザブザブ、曲りくねった用水路をおそるおそる進んで行くと、急に目の前が、パッと明るくなって、まぶしくてまぶしくて、思わず目を閉じてしまいました。

が、しばらくして、そっと目を開けて見ると、そこは、ズイドウの向う口で――その外では、三びきの山犬と人間の子どもが、はげしいたたかいを始めていました。で、ハラハラさせられながらもよく見ると、その人間の子どもは、自分をいたわって、丸木橋を渡してくれた金太郎だと分かりました。

それで、じ―っと息をのんで見守っていると――金太郎は、じょう夫なふじづるの先に、石のようにかたいかしの木のぼう切れをしっかり結びつけて、それをぐるぐる水車のようにふり回して、山犬どもを追っぱらおうとしていました。

強い力の金太郎が、力一ぱいふり回すぼう切れに、三びきの山犬は、どうすることも出来ません。ただ、とぎすましたは物のようにするどいきばをむき出したまゝ、遠巻きにうなるだけで、ぐるぐる生きもののように回るぼう切れを見ていると、自分たちの目まで回ってしまいそうです。

山犬どもにとっては、人間の金太郎よりも、ふじづるの先のぼう切れが、おそろしくておそろしくてなりません。

ちょっとでも油だんをすれば、すぐ、ぼう切れが飛んで来るので……

「ハーア、ハーア――」

荒い息をつきながら、少しの休みもなく自分達の目も、ぐるぐる回していなければなりません。それで、山犬どもは、だんだん気がくるいそうになって来ました。

それで、若い方のぶち毛をしたおす犬は、もう、しんぼうできなくなったのか、

「ウヽヽ！――」

と、きばをかんでねらいをつけ、ブルンと身をふるわせたかと思うと、パッと一ペンに、自分のからだの五、六ばいも飛んで、遠くからぼう切れへ、サッとかみついて来ました。

が、それと同時に、

「えいっ！」

かけ声するどく、金太郎も、ふじづるを持った手首を、グッと急に、一たぐりたぐりました。

すると、ぼう切れが、山犬の横っつらを、カーンとたたきつけたので……

「キャン！キャン！キャン――」

悲鳴をあげて山犬は、そこから十二、三メートルもはなれた太いみきのいちょうの根もとまで、からだごとはね飛ばされてしまいました。そして、しばらくは、ぐったりたおれたままで、すぐには、起き上られそうもありません。

これを見ると――今まで、きばをむいてうめきながらも、じっと一と所に立って、ただ目だけ光らせて、回るぼう切れをにらんでいた母犬らしい、まっ黒な毛の山犬は、らんらんと光る青い目を、一そうするどくかがやかせて……

「よくも、むす子を――」

と、首の毛をさかだて、ぼう切れの回る速さに……

「ハーア　ハーア――」

息を合わせていたかと思うと、

サッと、急に大きく飛んで、カクッと、ぼう切れにかみつきました。

が、けんのようにするどいきばでも、石のようにかたいかしの木のぼう切れは、かみくだくことが出来ません。それどころかかえってきょう犬のようにかみついた自分の力で、ボキッときばが、根もとから折れてしまって……

「キャン！キャン！」

と、一声　二声、鳴き残して、すぐ一目散ににげて行きました。

で、ジロッポも、少し安心して、ズイドウのなかから出て見ようと、二、三歩あるきかけると、ふいに、パッと目の前を、黒いかげが通り過ぎたので、思わず首を、ハッとちじめました。

が、よく見なおすと、そのかげは、はい色をした大きなおす犬で、初めは、おれが年寄りでも、けいけんがあるから人間なんぞに負けないぞ、と言ったおごりを顔にうかべ、金太郎を、ぐっとにらみつけたまま、くんくん鼻を鳴らして、ぐるぐる金太郎のしゅう囲を回っていました。

だが、この父親らしい山犬は、二ひきの失敗を知っているので、なかなかすぐには、おそいかかって行こうとはしません。

と言って、にげれば、すぐ、ふじづるがのびて来て、ぼう切れにたたきつけられるので、進むこともしりぞくこともできなくなっていました。

しかし、しばらく、ぐるぐる回っているうちに、犬の習せいも手つだって、むやみにかみつきたくなったのか――でも、そこは、老犬のこととて、長年のけいけんで、

「うぅ――」

と、一うなりうなるとはやてのように、す早く飛びこんで、あっと言う間に、サッと、ぼう切れにかみつきました。

が、金太郎は落ちつきはらって、少しななめ横にふじづるを、だんだん早く強く回したので、山犬は、ぼう切れをくわえたままちゅうにういて、ぐるぐるふり回され、その速度が加わると、クラクラッと目が回り、なんだか気まで遠くなりそうです。

そして、山犬が、すごい勢いで、上向きに回ろうとした時、

急に、金太郎が、

「えーい！」

と、さけんで、投げるようにしてふじづるを、ポイッとはなすと、山犬は、ちょうど鳥でも飛ぶように空中を大きく飛んで、向こうに見える丘をこえて、遠くみえなくなってしまいました。

こうして、山犬が、全部こらしめられてしまうと、どこからともなく、野じかの家ぞくが現われて、しかの習かんであるうれしい時の感じを表す　　トン、トン、トンと、前足で地面をたたきながら、みんな金太郎のそばへ、からだをすりよせて行きました。

それで、ジロッポも……

「おかあさん――」

と、ズイドウのなかから出て見ると、そこは、広い畑で、畑のうしろには高い丘があって、かやぶきの小さい家が建っていました。

そして、その家の前に、白がまじりのかみをたばねてうしろへ長くたらした金太郎の母が、山のなかでくらしている人とも思えないほど、きちんと着物をつつましく着て、やっと安心したと言ったほほえみをうかべ、金太郎や野じか達を見つめながら立っていました。